

【会長】

それでは、これより議題を進行させていただきたいと思います。

まず、一つ目は第1層生活支援コーディネーターの活動方針についてご説明をお願いいたします。

【北区社会福祉協議会】

北区社会福祉協議会です。どうぞよろしくお願いいたします。

私から、第1層生活支援コーディネーターの活動方針についてご報告をさせていただきます。着座にて失礼いたします。

資料4をお手元に、それから本日お配りをしております地域ケア情報見える化サイト「ミルモネット」のご案内という資料をお手元にご準備をしていただければと思います。

それでは、ご報告をさせていただきます。今回、第1層生活支援コーディネーターの令和元年度の活動方針について、ご報告をさせていただきますに当たり、昨年度、平成30年度のこちらの会議で地域の課題と、それから取り組み状況などをご報告をさせていただきましたが、その内容を再度、振り返りをいたしまして、その結果に基づき今年度の活動方針を立てさせていただきましたので、まずはこの課題、現状の課題、それから、そういったことについてのまとめ、そちらをまずさせていただきます、ご報告、活動方針のほうに移らせていただきます。

今回、お配りをしております資料の6のこの厚生労働省が、後ほど、細かくは会長から少し触れていただくかと思いますが、これからの地域づくり戦略についてという厚生労働省が出している資料に基づき、この「集い」、それから「互い」、それから「知恵を出し合い」というこの三つのカテゴリーで、この資料が構成されておりますが、今回、昨年度の出しました課題を、この資料に基づきこの三つに再分類をさせていただきます、課題と現状にまとめさせていただきましたのが、この資料の4になります。

それでは、資料の4ですけれども、この「集い」ですが、まずは、通いの場づくりからスタートしたらということなんですけれども、この「集い」というところに入ります内容につきまして、課題ですけれども、担い手の不足、それから場所の不足、それから情報の不足という、地域にどんな情報がどんな活動があるのか把握がなかなかしづらいというような情報の不足。こういったような課題が挙がっております。それにつきまして、現状としてはさまざまな形で、既存の活動参加者へ担い手不足については、協力依

頼をしたり、あるいは高齢者あんしんセンターによっては、地域の資源を地図に落として、そういったものを住民に公開をしているようなセンターもございます。そういった取り組みも現状としては、行われております。

それからもう一つ、「互い」というところになります。既にある互助の発見、新たな互助の生み出しという②になります。ここの項目の中には生活の課題としては、生活支援の不足といういわゆるごみ出しですとか、受診、外出の支援ですとかそういった困りごとに対する支援が、地域の中で不足をしているのではないかとということ。それから、なかなか店舗が少なく宅配や通販などの利用手続きが難しいというような理由で、買い物が困難な地域もあるというようなことですとか、あとは交通や移動、地形的なことによって、移動がなかなか難しいような地域もあるというような課題が挙げられています。それにつきまして、現状ですけれども、一部の高齢者あんしんセンターによっては、こういった移動販売ですとか、スーパーの宅配ですとか、そういった企業が行うようなサービスに対する情報収集を行って、その地域の住民の皆さんに情報提供していきやすいようなこともございます。

それから、この生活支援の不足というところで、住民主体の助け合いサービス、買い物支援ですとか電球交換ですとかそういったようなことを、住民の方々が主体となっていて行われているサービスというのが、区内に現在は6カ所程度確認をしております。また、住民の主体ではないんですけれども、NPO法人や団体などが担い手となって活躍をしているサービス、そういったものもございます。

それから三つ目の「知恵を出し合い」というところですが、こちらについては、交流・つながりというところの課題が挙がっておりました。子育て世代、若い世代が非常に多い地域もあります。ただ、なかなかそういった世代と高齢者との交流やつながりが何かちょっと薄い傾向があるのではないかと。担い手としても、ぜひこういった世代にも活躍をしてもらいたいけれども、なかなかこういった高齢者との交流が少ないのではないかとというような傾向があると。

それから、やはり地域の中で課題や資源の情報を共有する場が不足をしているのではないかと。そのような課題が挙がっておりました。それについて現状ですけれども、こういったことが行われているかというところですが、後ほどご報告いたしますが、地域包括ケア連絡会など多職種、いろいろな方たちが集まって、地域のことを考えていくような連絡会が、既に開催をされていたり、あるいは「志茂ジェネ協議会」、後ほどご報告

が会長からあるとは思いますが、「志茂ジェネ協議会」や区が行っております円卓会議など、定期的な話し合いの場も、実は行われているというような現状がございます。

こういった課題、それから現状を踏まえまして、「まとめ」というところにまとめさせていただきました。一つ、資源というところに関しては、そのマップづくり、地図にいろいろなサロンの場所ですとか、活動の場所が見えるような形で、「見える化」をしているあんしんセンターなどもございますけれども、北区全体としては、いろんな資源、情報の見える化というところについては、まだまだこれからというような現状がございます。

また、大事なところですが、この見える化というものができていても、なかなかそれが有効活用ができていない、その区民の皆さんにどのように還元をしていくのかということが、まだまだ課題があるというような現状があるかと思います。それから、資源ですが、社会資源、さまざまな情報ですが、そういったもの既にいろいろなサロンですとかの情報は収集はしておりますけれども、今後さらにこの住民主体の皆さんたちの活動、ボランティア活動だけでなく、企業や事業所などが行っている多様なサービスについても、やっぱり意識的に情報収集をしていく、そういった必要があるのかなということがあります。

それから、担い手不足については、さまざまな取り組みをコーディネーターたちが行いながら、丁寧な働きかけを行っているところではあります。さらにそうした担い手の皆さんをどういった資源に、どういった活動に結びつけていけばよいのかということについては、これから先進の事例なども学びながら、何か深めていく必要があるのかなというふうに思っております。

それから、資源というところですが、情報というところですが、新しい資源を今後もっと把握をして、さらにどの地域にどのような資源が多くて少ないのか、そういったような分析をしていくことが必要だということに感じております。そのことで、いろいろな方々が行う活動や、あとは居場所づくり、サロンづくり、そういったことやあとは、生活支援の不足に対応するための互助の仕組みづくりがそういった情報を整理、分析することで促進されるのではないかなと思っております。

それから、地域ごとの取り組み状況を裏面になりますが、把握をすることで、この地域特性、それぞれ違いますので、地域特性を生かした地域づくりが進められるのではないかなというふうに考えております。

それから、話し合いの場、協議体とも呼んでおりますが、そうした話し合う場、この地域にどのような活動ですとか、サービスが不足しているのか、そういったようなことも踏まえ、話し合いをするような場が必要だと考えております。「志茂ジェネ協議会」などの取り組みと言った、既に先進事例がございますので、こうした取り組みを踏まえ、定期的な話し合いの場がもっと継続的に行われる、立ち上がっていくこと、そういったことも必要なのではないかなということが課題としてあげられます。こうした課題などを整理する中で見えてきたことでございます。これらの現状を踏まえ、今年度、令和元年度の活動方針ということで4点、挙げさせていただきました。

まず一つは、多様な地域資源を把握し、活用するための情報システム、情報のシステムを導入したいということを考えております。これまで、この生活支援コーディネーターが、各々足を使いまして地域を回り、資源調査を行ってきております。そうした集めた情報を整理、分析をすることで、区民に地域の情報提供を行ってきたんですけども、なかなかその区民の状況に合わせた情報提供をしづらいという課題が挙がっております。なかなか情報の活用ができないという課題があります。ですので、その地域の必要なニーズ、必要なサービス、そういったような求めていること、それから多様な資源ですね。こういった情報があるかというものをきちんと把握をして、そして把握をするだけではなくて、その情報が見える化して、高齢者あんしんセンターごとの特性に合わせた資源の活用と、それから新しい活動の開発、そういったものをしていきたいというふうに考えております。そのために、この情報システムの導入を考えております。情報システムというのは簡単にですけども、こういったものかということが、本日、席上に配付をしております「ミルモネット」のご案内と、細かくはちょっと触れませんが、こちらのパンフレットもお手元のほうにお配りされているかと思います。この活用の導入を考えておりますのは、この地域ケア情報見える化サイト「ミルモネット」というものを考えております。

こちらの「ミルモネット」は、インターネットがつながる環境であれば、事前に交付をされているパスワードなどを入れることによって、入力作業などが特定のパソコンからしかできないということではなくて、どのパソコンからも入力ができるというような特徴があることと、それからこれを活用して、まずはこの介護保険外の情報を中心に、地域のボランティアグループさんなど、また町会自治会様や、民生委員など地域の皆さんが行っている活動などを中心に、情報をまずは、こちらのサイトのほうに入れていきな

がら、活動の見える化などを図っていきたいと思っております。このサイトの特徴というところですが、一番は今、把握をしている情報をこのサイトにを入力をしていくことによって、一目で何をやっているところ、何をやっている団体なのかというものが写真などもありますので、すごくわかりやすく見るのが、入力したものを後から見るができる。

それから、最大のポイントというのは、この四つお写真が載っておりますが、この右の下の絞り込み条件設定やマップ検索も可能と書いてございますが、こうした入力をした情報が先ほど活用がされてないという課題がありましたが、このサイトに必要な情報を入れていきますと、例えば区民の方で岸町一丁目に住んでいる〇〇さんという方が、何か近所のお茶を飲む場所に行きたいんだけど、どこが一番近いですかというようなご質問などがあつた場合、その住所から一番近くに、この周辺にどのサロンがあるのか、どんなサービスがあるのか、そういったものを地図で示すことができ、そうしたわかりやすい情報を、その情報を求めている区民の方に提供することができる。あなたの近くにはこんなにたくさんありますよ。こういうサロンがありますよというようなことが、ご紹介することができる。こうしたことが「ミルモネット」の最大のポイントになるのかなと思います。

それから、各地域ごとにどんな情報が、どんなサロン、サービスがあるのかということも、まとめることができるということが、最大のポイントかなというふうに思います。こうしたサイトを活用することで、情報の見える化をしていきたいと思っております。

では、資料の4にお戻りをいただきまして、2番目ですけれども、生活支援コーディネーターに対する研修の実施、今年度も行っていきたいと思っております。今年度は、生活支援コーディネーターのさらに基礎的な知識というものも、知識や姿勢を学ぶ内容も、また繰り返しにはなりますが、再度、含めて先ほどの情報システムの活用方法、それから社会資源、地域の人材も含めて、社会資源に関する研修を行っていきたいというふうに考えております。

それから、3番目ですけれども、第2層生活支援コーディネーターに対するヒアリングの実施ということです。私ども社会福祉協議会は、第1層の生活支援コーディネーターということで、北区全域を担当しております。ですので、第1層の生活支援コーディネーターが、各高齢者あんしんセンターにご訪問をして、この2層の各高齢者あんしんセンターにいる生活支援コーディネーターが把握をしている地域の特性ですとか、課題

ですとか、それから地域づくりの取り組みの状況などを確認し、教えていただいて、今後、研修ですとか、それから環境整備などに役立てるそういったことの取り組みを既に始めさせていただいております。6月末現在で、10カ所のあんしんセンターにヒアリングで行かせていただきました。ヒアリングの項目としては、ここに書かれているような内容となっております。

それから四つ目ですけれども、話し合いの場（協議体）の立ち上げ・運営支援ということでございます。地域に多様な主体による、いろいろな方々が主体となって行う活動が、たくさん生まれることが大事だと思っております。そのために、北区全域とかそういったことではなくて、小さな地域の中で顔の見える関係の多様なメンバーが集まって、地域の我がまちの課題、それから資源、必要な何か不足をしている仕組みがないか、新たに必要な仕組みは何か、そういったような話し合いを定期的に行う場、そういったものがもっとたくさんできるとよいのではないかというふうに考えております。そのために、そういった話し合いをする場の立ち上げ、話し合いをする場をつくる、立ち上げたいよという場合には、そちらの相談に乗りまして、運営を支援していく、そういったことも行っていきたいと思っております。

それから、それぞれ後ほどご報告いたしますが、高齢者あんしんセンター3地区、それから高齢者あんしんセンターごとに、この地域包括ケア連絡会、地域の皆様との話し合いの場を行っておりますので、そちらの企画、運営などにつきましても、ご支援を1層としてさせていただきたいというふうに考えております。早口になりましたが、今年度の第1層生活支援コーディネーターの活動方針についてご報告をさせていただきました。

以上です。ありがとうございました。

【会長】

はい。ありがとうございます。第1層生活支援コーディネーターの活動方針について、社会福祉協議会からご説明いただきました。今のご報告に関しまして、ご質問、ご意見、感想などありましたら、委員の皆様からいただきたいと思います。いかがでしょうか。

では、ちょっと私のほうからも補足させていただきますと、最後、資料4の裏面のほうで、活動方針の4本柱ということで、それぞれ重要な視点でお示しをいただいたと思います。これ以前に、その一つ手前の資料3のほうも、この「集い」ですとか、「支え合い」、「知恵」といったといったところも、この厚労省の示しているこれからの地域

づくり戦略というものと、これを北区版といいますか、大都市版で、もう一回、考え直されてまとめられたものだと思います。ですので、本当に国のモデルをいち早く北区版でちょっと焼き直して、おまとめになったのではないかなと思っております。

少しご説明、追加いたしますと、特に①の多様な地域資源を把握し、活用するための情報システムの導入。これはまだ、国のほうもここまでのことは明示していないんですけれども、まさしくこれは都会、都市部であるがゆえのぜいたくな悩みなんですけれども、地域の資源、特に介護保険外のインフォーマルなサービスとか、あるいは団体さんとか資源というのが、北区を初めまして都内にはたくさんあると。あるけれども、なかなか情報があり過ぎて、それが本当にそれぞれの住民の方々に適したものなのかどうかわからない。あるいは、どんどん新しいサービスなり、新しい団体が生まれては消え、生まれては消えますので、今までの包括の職員の方の知識とか、ネットワークだけではなかなかカバーできないというのが現状なんです。この辺が多分、厚労省のほうは、郡部といいますか、地方都市も想定していますので、そういう必要がまだまだないということで、多分こういう紹介システムに関しては触れてないんだと思うんですけれども、これは、情報をどう整理してオンタイムに住民の方に提供するかということが、非常にこういう大都市部の大きな課題になっていたのではないかなと思います。それを、たまたまですけれども、ちょっと私どもの研究室でご縁がありまして、先ほどの「ミルモネット」さんという比較的ベンチャーに近いんですけれども、新しい会社さんが地域資源の見える化というのを、我々がいろんなところでお話ししていたところに関しまして、ちょっと非常に関心を持って、共同開発をしていただいたというところです。

この会社自体は、もともとはAIを使ってケアマネジメントをつくっていったりとか、あるいはそういったウェブ系、インターネットを活用したようなビジネスに非常に精通されているんですけど、それも健康とか福祉といったような視点で、仕事をいろいろ展開されている会社であります。ですので、テクノロジーとしてのこのシステムというのは非常に使い勝手がよくて、一步、何か例えば、大手の企業なんかも確かに地域の情報資源というのを、何か発掘して提供するというようなことも、考えているところはあるんですけれども、地元密着の情報というよりも、例えばセブンイレブンのチェーンならこんなことをしていますよとか、どこどこの、例えば、フィットネスのグループなんかは、こういうのをしていますよというような、割と大きなレベルの情報が多いんですけれども、非常にこの草の根的に、やっぱりこういった情報というのは探していくことが

重要だろうということで、そもそも共同開発したときに、現場の包括さんなりの意見をどれだけ反映できるかというのが、みそだろうということで、議論してまいりました。

北区さんの今回のこの導入に先立ちまして、大田区のほうで我々ずっといろいろ共同事業をやっていました関係で、その開発のときに、大田区の包括さんと、役所と、その「ミルモネット」と我々で、じゃあ、どういう情報が欲しいかとか、どうすれば操作しやすいかといったような、本当にユーザー、包括の職員がコーディネーターとして使いやすいものというもので、1年以上にわたって試行錯誤して開発してきた。その結果をうまくいきそうだということで、北区さんのほうで今後、取り入れられるというようなことで、話が進んでいるというところなんです。

細かな話いたしますと、お金がかからないというところも大きなポイントでして、これはなぜかからないのかというところなんですけれども、そもそもこの会社自身がゆくゆくは介護とか健康福祉に関する人材派遣とか、あるいはマッチングというものも考えてまして、今回は第一弾として、ボランティアであるとか、市民の活動といったような無償の活動を提供したり、情報提供というのが第一陣としてやっているんですけれども。ゆくゆくは、介護の事業所さんとかそういったところで人材が欲しい場合に、じゃあボランティアさんだけじゃなくて、例えば有償の人も派遣できますよとか、どういうところなら働けますよといったようなそういうところで、またマッチングのところなんかでもビジネスとして可能性があるんじゃないかなというように。その先駆的な先行投資的なところで、まず地域のネットワークづくりに、ご自分たちの情報も使ってもらってというようにところの第一段階として入ってきているというところがありまして、そういう意味でほとんどお金がかからないというシステムが、大手がやっているものとは大きく違うところではないかなと思っております。これはまた、いずれ、現場で使われていくということで、それぞれのご報告をまた、いただければというふうに思っております。

あと、生活支援コーディネーターの研修の実施とか、あるいは第2層の生活支援コーディネーターさんに対するヒアリングといったものも。これはもう、本当に肅々と今年度、進められていくというところなんですけれども、また話し合いの場の立ち上げとか運営支援、これも後ほど、いわゆる「志茂ジェネプロジェクト」という我々が、一緒にコラボレーションしましたプロジェクトの中で、じゃあどのような協議会の立ち上げというのが、実践的かというようにところもご紹介できるんじゃないかなと思っております。

す。ただ、こういった志茂ジェネのモデル事業というものを、いかに北区の中でも横展開できるかという意味で、先に社協さんのほうが志茂ジェネでできたいろんな試行錯誤を、ほかの地域に広げていくときには、やっぱりこの四つの柱が重要だということで、お示しをいただいたんではないかなと、そういうように理解しております。大体、そんな感じでよろしいでしょう。

【北区社会福祉協議会】

ありがとうございます。

【会長】

ありがとうございます。ちょっとそういう私の補足もありましたけれども、全体、今後の1層生活支援コーディネーターの活動に関しまして、委員の皆様方から感想でも、ご意見でもいいんですけど、何か頂戴できればと思いますが、いかがでしょうか。

委員、お願いいたします。

【委員】

この「ミルモネット」なんですが、これのいわゆる情報の質の担保というのは、どういう形でされるのかというところなんですね。結局、事業者が入力されるということで、事業者のいい内容ということになってくるので、場合によっては羊頭狗肉であったりとかということも、出てくるんじゃないかという気もするんですが、その辺は何かどこかで精査されるような仕組みはあるのかどうか。

【会長】

どうぞ。

【北区社会福祉協議会】

では、まだこれから少し細かな情報をどのようにというところは、これから検討していくところではありますが、まずは情報としては、介護保険外の情報ということで、インフォーマルサービスの情報ということ、まずは入れていこうということで、一つはこの私ども生活支援コーディネーター、各高齢者あんしんセンター、それから区役所、それから社会福祉協議会、まずはそういったところが、把握をしている情報を載せていかどうかという確認を取りながら、情報をシステムに入力をしていくということ。それから、企業さんですとか事業所さんに関して検討ですけれども、まずはインフォーマルなサービス、企業でもその本来事業ではなくて、介護保険の事業ではない部分で行っている事業もあるかと思うので、まずはそういった情報については、企業さんのほ

うが載せて直接的に入力をしていただくというような形をちょっと考えておりますので、
ですので情報は勝手にお載せをするということではなくて、これから載せてもいいかどうかの確認をしながら載せていくということで、ただ、細かな、勝手に情報にどのようなどこまでというところは、もうちょっと検討という形になっております。

【会長】

どうぞ。

【委員】

要は、事業所が直接載せる情報が、極端に言えば誇大広告ではないのかどうかといったようなあたりの精査は、どこかでされるかどうかということなんです。

【北区社会福祉協議会】

そうですね。入力する内容については、もうそもそも決まった内容になっておりますので、その情報が正しい情報かどうかということについては、掲載をされてから確認をしていくということになるのかなと思います。そもそも、入力をしていただくには、今のところ考えているのは、IDとパスワードというものを振り分けなければならないということがありますので、私たちの把握をしてないところで、勝手に情報がどんどん入力されていくということがないかと思いますので、ある程度どの事業所さんが載せていくということは、把握をしてからということになるかと思いますので、その情報については正しい情報かどうかというのを確認していくというような作業が、はい、ご指摘のとおり必要なのかなというふうには思っております。

【会長】

申し添えますと、大きく情報源って二つのルートからあるんじゃないかなと思っています。一つは、今現在でもいろんなサークルですとか団体ですとか、企業さんが包括にどんどんチラシですとか、口コミで有償の会社なんかでしたら営業になりますし、そうでなくてもNPOとか、ボランティアさんなどからこういう団体していますというようなことで、チラシを持ってこられたりするんですね。それを現在では、紙ベースでこんな分厚いファイルでもらったものを、担当の包括の職員の方がもう後ろの本棚いっぱい並べて、その中で紹介していくみたいな形だと思います。ですので、その時点で既に、誇大広告だの何かもう玉石混合の情報が入ってきているというのは、確かなんですね。ただ、それをまず、本棚にたまっているものをインターネットの中に落として、用語あるいはキーワードで分類して、体操系これだけありますよというような形で、効率的に

紹介できるかなというのが一つだと思います。

もう一つのルートは、やっぱりこれも支え合いの協議体と非常に連携していくべきものでありまして、よく協議体とかいろんなまちの地域の会議のときですね、マップづくりをされたりとか、地域の資源探しというのを参加者の方がされるかと思うんです。それを職員の方が模造紙でぺたぺたと張っていくけれども、なかなかそれが終わった後、せいぜい写真で撮って残しておくぐらいのものなんです。逆に住民の方々から出てきた生の情報なんかを、許可をもらわれて一元管理するというようなことの方向性もあるかと思います。そういったいろんな情報が入ってくるのを、まず集めて整理するというのが第一段階なんです。大事なのはおっしゃるとおりで、よっぽど怪しいところが入ってくるとまずいということで、これに関しては、何といいますかイメージとして食べログってございますよね。ユーザーの方が実際これは紹介してきたけれども、よくなかったわよとか、これは案外よかったわよ、みたいなものもコミュニティも一緒に走らせて、包括は隣の包括で紹介したけどよかったのかどうかとか、行ってみたけれども、結局終わってたわよとかですね、そういった情報も生で総合的に使うことができ、自然に取捨選択されていくような形になっていくのが一つ理想かなというふうに考えております。

以上です。

ほか、いかがでしょうか。

じゃあ、これは厚労省のこれに関しては、何かご説明は北区社会福祉協議会のほう、あるいは何か追加はなさいますか。たたき台になっているというか。

【北区社会福祉協議会】

すみません。そうですね。細かいご説明は……

【会長】

見方というか、考え方だけでも

【北区社会福祉協議会】

そうですね、これからの地域づくりをするに当たって、地域づくりといっても何から始めたらいいかというようなところが、それぞれの各今、進めているところではないかということで、その厚労省がこうしたステップを踏みながら、高齢者が安心して暮らせる地域づくりをしていったらいいのではないかということで、発信をしている情報になっておりまして、これは誰でも見られるようなインターネットで公開をされて

いるようなもので、随時、更新がされている内容なんですけれども、その中で一つは、その第一部というところのこの「集い編」というところで、まずは高齢者の方たちが定期的に体操など、定期的に集まる通いの場というところが、身近にそういったものがたくさんできることが、まずは大事じゃないかということが、そこから始めて、その場が少しずつでき、その場づくりが必要じゃないかということと、それから次のステップのところでの「互い」というところで、先ほど少しご説明いたしました、ちょっと集ってくるだけではなくて、買い物がちょっと困っているですといったような困りごとに対応していくような取り組み、そこも住民の皆さん、それから企業の皆さん、そういった方々の、いろいろな資源を活用しながらつくっていく、また今あるものを生かして、拡大をしていくような形でつくっていくということが、その場をつくり、そして、そうした場ができることで、こうしたつながりの中から生活支援の互いという、互助のサービスが生まれてくるのではないかということ。

それから、もう一つは、「知恵を出し合い編」というところで、この協議体いろいろな多職種、いろんな方々が話し合い、知恵を出し合って、地域の課題を解決していこうというところで、この地域づくり戦略のほうでは、この中身は主に多職種ということで、専門職のことが書かれておりますが、北区の中としてはその地域の専門家だけではなくて、その住民の皆さん、既に活動している皆さん、そういったいろいろな方たちがやはり知恵を出し合って、地域のことは地域にお住まいの皆さんがよくわかっていらっしゃるというところでは、そうした皆さんで集まって、知恵を出し合っていく。ですので、住民の皆さんも専門職の知識がある専門職の皆さんも集まって地域課題解決に向けて連携をしていく。そうしたふうに、ちょっと読みかえをしておりますけれども、そういったような形で、この地域づくりをしていくとよいのではないかということで、かなり中、長いんですけれども、いろいろな地域の事例などもたくさん載っておりますので、私たちもまたこうした事例も参考にしながら、進めていけばいいのかなというふうに思っております。

【会長】

ありがとうございます。これは、厚労省のほうタイトルとして、これからの地域づくり戦略というのをバンと太字で出しておるんですね。この経緯に関しては、もう少しだけちょっと補足いたしますと、今から5、6年前ぐらいまでは基本チェックリスト、住民の方々にも全数配付したりして、それでそのスコアが低かった方に関して、あなた

特定高齢ですとかですね。2次予防の対象者ですみたいな黄色信号の方を招集して、その方々にトレーニングマシンに乗ってもらったりとか、何か強度な介入をしようというような、そういうモデルで厚労省のほうも全国の自治体に号令かけて、ハイリスクの人を拾い上げて、その人たちを徹底的にトレーニングするというようなそういうアプローチを取っていた時代がしばらく続きました。しかし、これは北区でも何度も議論に出ましたけれども、そういうもう既に虚弱であったり、ちょっと閉じこもりがちの方というのは、幾らそういうチェックリストという召集令状が来ても、それに合わせて外へまた出てくることもないですし、本当に空振りが連続していたというのが全国の傾向だったんですね。

やはり厚労省のほうも、もう一回見直して、むしろそういういろんな社会資源があって、集えたり社会参加ができる地域のほうが、そこに住んでる住民さん自身の健康度がアップしているというようなことを、全国的ないろんな調査で把握しまして、これが1対1でリスクの高い人を引っ張ってくるというよりも、地域づくりをする中でできるだけ通ったり、集まったりする団体とか場所をつくっていくほうが何というんですか、急がば回れだろうということになりまして、それで厚労省のほうもこういう地域づくりというものに大きくシフトをしてきたという、こういう経緯があります。

その地域づくりというような言葉は、非常に耳心地はいいんですけれども、じゃあどうしたらいいのというところで、実際どうすれば人が集まるのかとか、あるいはそこで単に集まって楽しかったねだけではなくて、最終的には介護予防、健康づくりとともにちょっとした困りごとの支え合いまで、助け合いまでするにはどうしたらいいのかといったようなことも大事ですし、そういった知恵はどういうものがあるかということを第一弾でまとめたというのがこの資料だと思います。

この資料の中で、本当に全国のいろんな自治体の好事例というのが散見されるわけなんですけれども、これは私の私見なんですけれども、今まで第1部の地域包括ケアの会議の中でもできたものを踏まえると、北区さんで直接、何かやっぱり参考とされたい点はどういうところがあるかなと思ひまして見ていましたら、この資料の2-7に互助を見つける参考事例、民間企業豊明市の例というのがあるんですね。この愛知県豊明市というのが、これは、結構いろんなところで厚労省のモデルとして、紹介されている自治体さんなんです、市長さん以下、結構、旗振って頑張ってる地域なんです。名古屋のベッドタウンで結構、都市型の地域なんですけれども、ここの特徴とい

うのがうまく民間企業と連携しているというところなんです。こちらにも幾つか書いていますけれども、カラオケボックスを利用した体操教室とか、いわゆる温泉施設、純粋じゃないですけど、健康センターみたいなところを利用して、アミューズメントをしながら健康を維持するとか、あとおもしろいのが、これは地元がトヨタさんなんで、トヨタの車のショールームなんかを、お客さんが来ない時間を地域に開放して、体操をやってもらったりとか、交流の場にしたりみたいなことで、そういう企業の取り組みなんかもやっているんですね。

そういうのも全部、役所と民間企業さんの中で、ときにはやっぱり役所がこういうことやってほしいけど、どっかやってくれるところないですかというようなところを、地域のいろんな連絡会を通して投げかけられたりとか、あるいは企業のほうからうちのあいているスペース、例えば具体的に言いますと、中部圏ですと、スギ薬局さんのチェーンなんかは、うちのあいているスペース活用して、何か血圧計も置くので、一緒に何かやりませんかみたいなことのオファーがあったりみたいなところですね。何かそういう企業側からもウイン・ウインの申し出があると、トヨタにしても、そういうガラス張りのスペースですので、そういうところで体操とかやっていると、トヨタの社会貢献性というのが住民の方にも見えて、何かショールームにも人が入りやすくなるというようなこともありまして、お互い何かその辺を役所のほうにやってほしいこと、それはつまり住民のニーズも踏まえてですけど、それと業者さんとか事業所のやってほしいことをうまくマッチングしているというようなところで、国のほうも着目しているというところがありますので、こういうところが結構、北区なんかもこれから地域支援との連携というところで、アイデアをいただけるところなんではないかなというふうに見ておりました。

あとは、大体、読んでいただいたらわかるじゃないかなと思います。どうでしょうか。よろしい。何か全体を通して。

委員、どうぞお願いします。

【委員】

すみません。ちょっと視点を変えて、商店街なんですけれども、商店街、意外に物販店少なくなりましたけど、少なくなった中で余計、お客さんを取り込むために、いろんな方の相談したり、いろんなお話をしているんですよね。それは、なぜ来るかというところと、梓にくくってないからですよ。いい時間に自分の好きな時間に来て、お店さんと話して、

自分の家族のこと健康のこと、いろんな話し合いをしているわけですね。そういうお店がお茶屋さんであれ、電気屋さんであれ、それから処方箋やっている薬局であれ、30分から1時間ぐらい、例えばうちなんか前、婦人服やっていたんですけれどね。1時間ぐらいお話しして、やっとなんか買ってってくれるんです。買ってってくれるか、くれないかはいいんですけれども、その話をしに来るのが楽しいんです。ついでに今、申しわけないから買っていこうかなというのもあるわけですね。そういった粋にはまらない、何でも話してくれるそういう場というのは、上からの押しつけじゃなくて、要するに自然とできていることなんですよね。20年、30年前はちょっと忙しかったから、買っていてくれればそれでいいということですけど、今、物販店で老舗のところは多分、お客さんとのコミュニケーションがすごい、それが利益になってくるという話で、どこでもやっております。うちのほうの電気屋さん、もう本当に電球取りつけるのも、150円の球を買ってもそれを取りつけに行っていてやっている。それがまた、返ってくる。そのぐらいしないと今、小売屋さんはやっていけないという部分で動いているわけです。

そこをわかっていただいて、感謝状出すのも何でしょうけれども、何かこう褒めていただければ、もっとまたやりたいという気持ちになるんじゃないかなと思います。それを今、商店街がすごい担っているんですよ。ですから、その辺にもちょっと目を当てていただいて、粋にとらわれない何もない、ただ来てしゃべって30分ぐらいしゃべって、A店というところはお話ししているでしょう、お客さんとお話ししていたのを遠慮して待っているんですよ。帰ったら入ってきて、また話をするんですよ。うちはお話し場じゃないと言っているんですけど、本人はすごい気持ちがいいんですよ、お店の人は。そういったところもありますので、もう少し商店街のそういったところを見直していただいて、利用と言ったらおかしいんですけれども、そこから生み出していただければありがたいかなと。決してすごい話じゃないんですよ、多分。商店街の人って余り口軽くないんですよ。聞いたのは絶対に言ったら、後で言われますから。もう聞いてやっているだけなんです。でも、言っているほうは楽しいというような形もありますので、もうちょっと見ていただければなと思います。

【会長】

はい。ありがとうございます。先ほどの地域包括支援センター運営協議会でも、もう本当に地域のいろんなサポート店を、どう連携するかという議論が出ておりましたが、ぜひこれまた、事務局のほうも商店街さんとの連携というのを、どういう仕組みでやっ

ていけるかというのを、てこ入れしていただいて。

【委員】

枠はつくらないでもいいんですよね。商店街はね。

【会長】

なるほど。そうですね。

【委員】

枠はつくらない。でも、よくやってくれましたねと。言えばそれまた、糧になってお客さんとの交流がよくなる。

【会長】

ありがとうございます。

委員、お願いします。

【委員】

高齢者あんしんセンターで生活支援コーディネーターをさせていただいております。よろしくお願いします。

今のお話を伺いまして、本当にそのとおりだなと思って伺っていたんですが、私たち、生活支援コーディネーターは外に出て、情報を集めている仕事なので、商店街さんでそういうお店を伺ってそれを地域の方に伝えるという役割もあるかなと思ってます。なので、今おっしゃっていたようなそういう商店街、ここではそんな電球を取りかえてくれるまでの支援をしてくれるといったその細かな情報を私たちがもって、それをまた多くの人に伝えていけるような方法はとても大切だなと思って、これからその辺をこのシステムとかいろんな形を使って、より多くの人にうまくつなげていきながらというところは、本当に努力したいなと思っております。ありがとうございました。

【会長】

はい。ありがとうございます。ほかはよろしいでしょうか。

委員、お願いします。

【委員】

今の委員のお話も大変、貴重なご意見だと思います。私、歯科のほうからの代表で来ていますので、ちょっと歯科のほうからお話させていただきますと、地域包括支援センター運営協議会でも、もちろんそうなんですけど、この北区だけではなくて、やっぱり東京全体もそうなんですけど、この資料を見ましたら、1－8ですか、高知県高知市の口

腔機能向上のための体操というのも出てました。これは、やはり北区には何年も前から、お口元気体操というDVDがあります。こういったものの活用もやっぱり考えていただきたいのと、それと、私お話聞きながらこの「ミルモネット」ですか。これをうまく活用していただきたいんですけれども、歯科だけではないんですが、東京医科歯科大学の戸原先生が中心になって、摂食嚥下関連医療資源マップというのを、これは公開しています、ホームページ上で。これは、摂食嚥下の評価医の医療機関がわかるだけでなく、今、飲食店もここにわかるようになっていきます。これはどういう飲食店かといいますが、普通の飲食店です。介護食専門の仕出しのお弁当屋さんとかというわけじゃなくて、一般に今、委員の話にもありましたが、商店街のレストランとか、料理屋さんとか、そういうところでも、例えば、摂食嚥下に問題ある方がいらしたら、一口大にしますよとか、あるいはミキサーにもできますよというような飲食店もその医療資源マップに入れるようになってきました。そういったところも、やっぱり地域の一つの活性化として、生活支援もそうですけれども、歯科の側から言わせていただくと食支援といいますか、食支援のところもちょっと行政のほうにも考えていただければなど。歯科のほうから協力できるところは、先ほど申しましたが、お口元気体操のところに歯科衛生士を派遣するとか、そういった口腔ケアの意識の向上とかというのにもお役に立てるのかなと、ちょっと思いましたので、お話をさせていただきました。

【会長】

はい。ありがとうございます。非常に心強い情報源で、食支援のほうもまた、こういった地域資源の中に入れていくというご意見いただきました。

それでは、ちょっと時間も大分押しておりますので、北区社会福祉協議会続きましてお願いしてよろしいですか。

【北区社会福祉協議会】

(2) でよろしいでしょうか。

【会長】

(2) のほうですね。はい。

【北区社会福祉協議会】

はい。では、2番の令和元年度の3圏域の地域包括ケア連絡会についてということについて、ご報告させていただきます。資料は5になります。

今年度、この3圏域の王子、赤羽、滝野川の3圏域のほうで今年度も地域包括ケア連

絡会を開催いたします。こちらのほうに概要をお示しをさせていただいております。簡単ですが、まず、王子の圏域の地域包括ケア連絡会は、8月23日の金曜日に行います。テーマは、『人はなぜ災害に備えないのか～安心して暮らせるまちを次世代へ～』というテーマで行う予定でおります。このテーマで、この講演とグループワークを地域の皆様にお集まりをいただきまして、行いたいというふうに考えてございます。

それから、2番ですけれども赤羽圏域です。9月25日の日に赤羽会館にて行います。テーマは、『地域のつながりを広げよう～ハートはopen ハードはclose』ということで、そういったネーミングがついておりますが、そういった内容で、やはりこうしたさまざまな意味での移動、オートロックですとか、移動がちょっと困難というようなそういったような障害ですね。そういった障害による多くの課題を、地域とのつながりをつくるということで、解決をしていけないかということで、事例の紹介とグループワークを行う予定でおります。

それから、3番目ですが、滝野川圏域ですけれども、10月9日に行います。テーマは、『あつてよかった地域コミュニティ～災害時に発揮される地域力～』というテーマで、やはりこちらも災害テーマということで、講演会と後は、グループワークを行う予定でおります。すみません、お時間もあれですので、細かな経緯はこちらのほうをご参照いただければと思います。

以上です。

【会長】

はい。ありがとうございます。今年度の地域包括ケアの連絡会3圏域に関して、ご報告いただきました。

これは、ご質問、ご意見いかがでしょうか。今回は、あれですね。全ての世代にも関心を持ってもらえるようにということで、特に防災というものを着目して、地域包括ケアの連絡会に転用されているというようなそういうあれかなと思いますが、よろしいでしょうか。

はい。それでは、この地域包括ケアの連絡会自体は3圏域で、年に1回ということで、このときに出てきた意見自体はまた、小部会みたいなものでフォローはされていくような感じになるのでしょうか。

【北区社会福祉協議会】

そうですね。また、今回の昨年度もまとめたような形でしていきながらということに

なるかと思います。

【会長】

そうですね。1回、議論が盛り上がってまた、1年後になってしまうとちょっとあれなんで、そこは熱が冷めないうちに行けそうなものはまた、やっていただくというのも大事なかなと思っております。

はい。ありがとうございます。

【会長】

特にじゃあ、3圏域地域包括連絡会の予定に関しましては、よろしゅうございますでしょうか。

それでは、最後、その他についてということで、ちょっと私のほう、きょう、今回は私ばかりしゃべっていて申しわけないんですが、ちょっと区と共同事業をさせていただいていた経緯がありますので、ご説明をさせていただきたいと思います。お手元にこのカラーのパンフレットが3種類あるかと思いますが、ちょっとこれにあわせてご説明したいと思います。

多世代共創社会のまちづくりマニュアルということで、三部作あるんですが、そもそもこの多世代共創社会のまちづくりというのは、これは先ほどの厚労省の地域づくりという、ほぼ同じようなスタンスといいますか、考えに基づいているんですけども、少し違います点は、厚労省のほうのいわゆる地域包括ケアというのは、現段階としては、まず第一弾、高齢者の方が住みやすい地域で、それぞれその人らしく人生を全うしていただくということで、主眼を高齢者に置いているわけなんですけれども、一步、共生社会というものが、もうこれは待ったなしで、そのニーズというのが高まってきているわけであります。

この北区の各協議会の中でも、在宅療養の部会なんかは先ほどの午前、第1部の議論でもありましたけれども、入り口は今まで高齢者の在宅医療介護連携でしたけれども、それを障害者であるとか子ども・子育てであるといったようなところで、広げていくということが、共生社会の方向性ということになっているわけなんですけれども、この地域包括ケアの健康づくりとか、あるいはちょっとした地域の支え合い自体も単に高齢者だけではなくて、全世代型のものに移行していくべきであろうという、国のほうも大きな流れはもっているんですけども、それをいち早く北区のほうで試験的に導入したそ

ういうモデルをやってきたというのが今までの経緯でございます。これは、例えば協議体マニュアルというのを、1ページめくっていただきますと、このピンク色のほうですね、これをめくっていただきますと、今回これは3年前から我々の研究所と北区さんにオファーをしまして、共同事業として新しく共生型の地域包括ケアを先取って、モデル事業をつくっていきませんかということで、お話ししたところ北区さんのほうも快諾いただいて、じゃあモデル事業を何かやっていきましょうということで、それで3年間お付き合いいただいたその一つの成果物ということになります。

この共同事業なんですけれども、共生社会をつくっていくというところなんです、国のJST、RISTEXという科学技術振興機構というところの3年間の研究費を用いて実践してきたわけなんです、大きな協力地域として、今回、北区さんそして、もう一つちょっと違う地域特性を持っているところというところで、川崎市の多摩区という南武線沿いの新興住宅地と梨畑が残っているようなそういう地域と、その二つの地域で同じような地域包括ケアの、特に地域での地域支援事業のほうですね、その多世代版というのを構築していったというのが経緯であります。このはじめにというこの1ページ、見ていただきますと、三つのその下のほうに図がありますけれども、助け合いをどうつくっていくかというところを、この地域でどうつくっていくかというところが大きな課題だったんですが、北区の中でも具体的に区役所のほうから、どこがモデル地区としてちょっとご推薦いただけるかというのを相談したところ、志茂の地区をご紹介いただいたと。非常に人口構成とか標準的な北区の実態像を反映しているのは志茂じゃないかということで、志茂のちょうど包括さんで言うと、みずべの苑さんの生活圏域を一つのフィールドとして、そこでいろんな支え合いに至るような集いの場ですとか、そういった仕掛け、仕組みを、それぞれ関係者で一緒につくっていったというそういう経緯であります。

厚労省のほうも先ほどの地域づくり戦略というところで、集うということと、お互い様で助け合うということと、知恵を出し合うといったようなところで、健康づくり介護予防の部分と、助け合いの部分と、それをどう実現していくかというような大きな方向性を持っておりまして、この志茂の地区でもそれを念頭に置きながら、しかも多世代でどうしていくかというようなところを具体的に模索していった次第であります。

なぜ、この多世代が、あるいは共生社会がというところなんですけれども、それは何といたしますか、多世代ありきとか共生社会ありきじゃなくて、今後の北区を初め、全国

の自治体を見ていったところ、明らかに人口が減少していくと。そうなったときに、そのコミュニティをどうしたら存続させるかというところ。先ほどの商店街のこともそうですし、地域の暮らし自体を持続させていくためには、やはり今、もう高齢者の方だけによって見えるサービスとか高齢者の方だけの健康づくり、介護予防ですとその先が多分続かないだろうと。それを支える次の世代が北区、あるいは志茂の地区に定住してもらって、そこでどんどんバトンタッチしていただくと、そういうようなコミュニティが必要なんではないかなというような議論になったところでもあります。

そのためには、最後この志茂というモデル地区でそれぞれの世代がバトンタッチしながら、助け合ったりあるいは集ったりというようなコミュニティをつくっていくためには、じゃあどうしたらいいのかというところの議論をした中で、この三つのその緑色の困りごとの支え合い、交流と居場所づくり、心の支え合いというこの三つのアプローチが必要ではないかなというような議論になりました。

都市部ですので、いきなりごみ出ししましょうとか、あるいは何かお手伝いしましょうかといっても、なかなかそういうところに遠慮されて反応される方も少ないですし、まずはやっぱり集えるような場所。それはお店であってもクリニックであってもどこでもいいんですけれども、普通に自然体で集える場所をどんどんつくっていこうというところ。その中で高齢者だけではなくて、結局、お客さんもなんですけれども、誰に限定というんじゃなくて、誰でもウェルカムな場所をどんどんつくっていこうというところ。それが2層目の交流と居場所づくりというところでもあります。

その交流と居場所づくり自体に、なかなかそこまで敷居が高いという方もいらっしゃるでしょうから、まずは近隣でちょっとした声かけとか、挨拶なんかもできるような地域をつくっていくということも大事だろうということで、気軽に声かけ、挨拶するためにはどうしていったらいいのかといったような、この三つの手段の支え合いというものを根幹に置いてやっていこうというようになりしました。こういったイメージというのがあるんですけど、それをじゃあ実際に地域でどういうように住民の方々と一緒にアクションを起こしていくかというところは、この3ページの協議体というところなんですけれども、これは厚労省のほうで先ほどの地域づくり戦略というところでほかの町の事例でも挙げておりますが、最終的に交流したりとかその結果、ちょっとした困りごとを解決するためにはどういったメンバーで、どういった話し合いの場をつくっていく必要があるかということを経験していく必要があるということで、この志茂の地区にお

いても町会さん、あるいは民生委員さん初め、地域のいろんな活動されている方々にお集まりいただいて、じゃあどういように何から考えていこうかというようなところからスタートしたというところであります。

この志茂の取り組みの特徴としますのは、やはり多世代というアプローチですので、高齢者に関係する団体さんだけではなくて、地元の具体的にいいますと、例えば「ほっこり〜の」さんといって、子育てされているママさんの団体さんですとか、あるいは小学校別とか、あるいは児童館とかそういった子どもに関わるような団体さんも、高齢者の団体さんも同じテーブルの中で協議をしていったというようなところは一つの特徴であります。恐らくこれは、今後のほかの地域に展開するときも、じゃあどういメンバーで、そういう進め方をしていったらいいのかということが、きょうは時間の関係で余り細かいことは申しませんが、何か参加して、参加した人がお土産を持って帰れるような、何か言うことを言って帰れるような会議をしていくということを心がけまして、現在もこれは、この会議の運営自体も研究の期間が終わりましたからは、第2層のコーディネーターであるみずべの苑の生活支援コーディネーターが今、引き継いで会議を運営していただいていると。それを1層のコーディネーターである社協さんが応援していただき、区であるとか我々がまた、それを後方支援しているというようなそういう形態のものでありまして、こういった地域づくりをしていく上ではまず、協議体が必要だと。みんなで考える場が必要だということで、こういったものも運営の仕方の手引きというものを一つ、つくっております。

二つ目に、このあいさつ運動というところで、一番、裾野の低い誰でも気軽に声をかけたりする活動をどう広げていくかというところなんですけれども、やはり今は、どうしても、むやみやたらに声をかけたり挨拶すると、特に年配の方が子どもとか子育て世代に声をかけると「きゃー」と言われて、逃げていかれることもありますので、じゃあどうすればみんな安心して声かけられるかというようなところで、この3ページにありますようなグッズですとかね、あるいはキャンペーンのような形で、この地域では声をかけるのが当たり前ですよみたいな土壌をどうつくっていくかというようなところを皆さんと議論しまして、この挨拶を専門でやってくれるような、気軽にやってくれるようなサポーターの養成というのもやってきたというような経緯があります。そういったものも、これも恐らくどこの地域でも使えるような内容なんではないかなということで、どのようにそういうキャンペーンを取り込んできたかというようなところがお示しして

いるところでございます。

三つ目のオレンジ色のほうですけれども、これが多世代交流とその多世代による助け合いの場をどうつくっていくかというところでありまして、やはり今回、3年間学んだところで非常に実感しましたのは、やっぱり交流できる場があるというところというのが非常に大事だと。幾らこうすればいいね、こういうイベントがいいねというようなお話をしても、どこかに定期的集えるような目に見える場があるということが、これほど重要なのかということを実感した次第であります。

3年間の取り組みの中で、たまたま志茂の協議体のメンバーであられた住民の方で、青少年委員をなさっていた方なんです、その方がたまたま持っているところでちょっと空き家があるよということで、何回かお話に出てきました「しもぞうハウス」という名前を、後で皆さんでつけたんですけれども、そういった空き家をご提供いただいて、それを社協さんが借り上げるような形で地域に開放していただくと。その場ができてから飛躍的に、やはり地域での交流、しかもいろんな団体さんが活用できるようになってきて、その中でちょっとずつですけれども、助け合いというものができてきているんじゃないかと。この助け合いといってもなかなか、いきなりごみ出ししましょうとか、相手のお家まで行ってどうしましょうというのは敷居が高いので、交流の場でできるような、解決できるような助け合いとか、ちょっとしたお助けならできるよということで、例えば高齢世代の方なら縫い物がお得意ですので、そういった縫い物ならママさん世代で、例えば幼稚園バッグをつくるのがわからないわとか、縫い物わからないわみたいな人でも、サポートできるよというようなことでなさったりとか。あるいは逆に、その場で解決することなら、例えば子育て世代の方なんかも、例えば、ちょっとスマホの扱いとか、先ほどの通信販売のことなんかだったら解決できるよみたいなそういういろんなアイデアが出てきまして、まず交流する場の中から、ちょっとずつ助け合いというものが生まれるんじゃないかなというようなことを経験してまいりました。

単に助け合い、助け合いのために集まるのではなくて、日ごろはそこで何か趣味の活動をされたり、あるいは体操の時間があったり、あるいはこれも北区でもともと認知症予防の取り組みから始まった絵本の読み聞かせのサークルの方々、我々もずっと応援しているんですけど、そういった方々が絵本なら自分たちも交流をきっかけできるよというようなことで、絵本タイムみたいなものをその一角でなさると、そういうものですと例えば子ども・子育て世代なんかも集まりやすいというようなことがわかったというよ

うなことで、場さえあればいろんな可能性があるんじゃないかなということを実感した次第であります。そういうことで、恐らく先ほどから私も口が酸っぱいほど申しましたけど、それぞれの地域でいかにその場を見つけるか、それもできるだけ気軽に集まって、だらりとした時間を過ごせるような場を見つけて開発していけるかということが、大事なんじゃないかなということはこのマニュアルでも切に訴えているというふうなところでもあります。

以上、こういった3年間、北区の関係者の皆様方にご協力いただきながら、どうやら志茂でやってきたものも、まだまだ現在進行形ですけれども、かなり部分部分的にはほかの地域にも応用していただけるものを出てきたんじゃないかということで、こういったものも使いながら、また先ほども委員がおっしゃっていた職員研修なんかのほうも、一緒に勉強していくことができればなというふうに考えているというところで、一応ご紹介させていただきました。

今まで、この3年間の取り組みを含めて、いろいろご議論もいただいたところもあるかかと思うんですが、非常にこの生活支援とか介護予防という国の流れを少し先んじた形で、北区で展開してきているわけなんですけど、ぜひ今日の残りの数分くらいになりますが、もしご質問ですとか、ご意見とか感想なんかいただければ、非常にありがたいかなと思っております。

そういうことでちょっといろいろご説明しましたけれども、どうでしょうか。何かご質問や、ご意見いただければありがたいですが、何かどうでしょうか。委員、もし何か、生活支援コーディネーターのお立場で一言いただければ、いかがでしょうか。

【委員】

どうもありがとうございます。協議体、本当に立ち上げるというところが、やっぱり私たちも課題だなとは思っているんですが、やっぱり地域ごとに本当に特性というか、雰囲気とかも全部違うので、本当にまず、こういう研修をたくさん伺うことで、それをじゃあ自分たちの地域に持って帰って、どんな方を集め、どんなイメージをいつもしながら、こういう勉強させていただいているかなとは思って、そういうふうに活動しているんですけれども、なので、自分、そうですね。日ごろ、とにかく私たちが出向いて、つながって、それをこういう形にしていくということ、本当に繰り返し続けながらとは思っています。

ありがとうございます。

【会長】

せっかくですので、区民の委員の方で感想でも、ご意見でもいただければ。委員、いかがでしょうか。

【委員】

区民代表委員でございます。今、先生のほうから場のつくり方、これが一番大変なことで、場があれば人が集まってくる。集まってきた中から、その活動の進展ができる。でも、なかなか各地域に場をつくるということがすごく難しくて、今、私自身も地域に区のほうの地域ネットを立ち上げてはみますが、参加はするんですが、ボランティアをする方が少ない。すごくそういう悩みがありまして、でもこの場の最初に楽しい場がつくれば、今後その中に少しできることを手伝ってもいいかなって思ってくれる方も出てくるのかなと。どうしたら楽しい場がつかれるのか、すごく課題であるんじゃないかなと思います。

【会長】

ありがとうございます。

これは、我々の北区社会福祉協議会と一緒に歩んできた経験なんですけれども、やっぱり場があって、初めから全ての世代がいろんなバックグラウンドの人たちが一緒に仲よくというのはなかなか難しいんですね。利用者として例えば、高齢者の団体もこの時間利用されていると。ちょっと時間がずれるなりお隣の部屋では、例えば子育て中の団体さんがいらっしゃるみたいな中で、初めはもう団体の活動をそれぞれされているのが主眼でいいと思うんですけれども、徐々に何かちょっと一緒にできることをやっていただくとか、あるいはイベントなんかでお見合いをしているといいますかね。ちょっとずつ馴染んでいただく中で、時間を共有したり、場所を共有したりというのが実践可能性のあるやり方かなというようなことを感じていました。

多分、先ほど担い手が少ないというのをおっしゃったとおりでありまして、特に高齢の方の場合、長年、3年、5年やっているとしんどくなってきた、引退という方も多いかと思うんですけれども、そこでやっぱりこの多世代というのが大事なところでして、確かに高齢者が20人来られると、子育て中の方はせいぜい2人とか3人かもしれませんけれども、でも、何というか筋のいい方といいますかね、そういう中の何人かの方はそのままやっぱり地域の活動に根づいてくださる方も多いんですね。その方がその方の世代になってきたら、また仲間を引っ張ってきてというようなことがありますので、数

の上では高齢者の方が圧倒的に多いかと思うんですが、数少なくてもちょっと手応えのありそうな若い世代の方を引き入れていくきっかけということは、やっぱり常に目を光らすという意味で大事なかなと思ひまして、そういう意味では多世代で集えるとか、多世代で支え合うという看板を大きく出しておくということは非常に大事なのではないかなというように考えておりました。

【委員】

ありがとうございます。

【会長】

最後、お一方か二方ぐらい、いかがでしょうか。じゃあ、町会さん、自治会さんを代
表して委員さん何か、場というようなところもありまして、どうでしょうか。

【委員】

今回、初めて出席させていただいて、大変、参考になるご意見を集められていらっしゃるなと思ったんですね。ただ一つ、自分が前からなんですけど、疑問の点というのが、町会・自治会さんで名簿というのがありますよね、町会・自治会の中に住まわれている方が。名簿をつくる町会・自治会さんが余りなくなっただんですね。それで、日本人のつき合いというのは、地域というのは、名簿からつき合いが始まるような点が日本らしい、日本人らしい生活状態じゃなかったのかなという気がするんですね。ただ、これに見える化、それから市民の問題とかそういう問題が書かれていますよね。うちも10年つくってなかった名簿を一昨年つくったんです。つくったら、やっぱり何が一番問題かって、年寄りが外へ出てきてくれないというのは、守秘義務でこんなもの書きませんというのが、5分の1出たんですね。こういう方たちをどうやって皆さん委員の方たちは、表に出てきてもらってこういう仲間に入ってもらって、先ほどの場をつくる、場があっても出てこなくちゃどうしようもないわけですよね。だから、その辺の今日お話も中に、3年間の間にそういうお話もあったような、あったかなとは思いますが、守秘義務に関して、皆さんどういうふうに考えていらっしゃるのか。守秘義務って言われちゃうと、今、世帯で2世帯、3世帯って家族で住むうちというのが余りなくて、お年寄りだけのひとり住まいとか、ご夫婦の後期高齢者の住まいとかで、年間にやっぱり1件か2件必ず死亡して亡くなられているのがわからずに、においでわかるというようなお話も出てきているんですね。ですから、表に出てきてもらうためにはどうするのか、その辺を知りたいですね、地域としたら。

以上です。

【会長】

はい。ありがとうございます。本当に大事なご指摘だと思います。食べ物といいますかね、会食なんかで誘導するのがいいのか、本当にどういった何といいますかね、この魅力的なものが必要なのかということ、非常に地域性もありますし、ご議論いただくまた、こういった、それこそまさしくこういう協議会というようなところで、それぞれが知恵をいただくということが非常に大事かと思います。一步、個人情報の問題ですね。こちら、やっぱりどこまではこの住民さんをお願いするところで、どこから先は包括さんなり、役所が手を出すべきかというところの線引きというものも非常に重要だと思いますので。本当にやっている中でせつかく町会さん、自治会さんが全員でやってらっしゃったものが、裏目に出たりということ自体は本当に避けたい、避けるべきことかと思しますので、ぜひそのあたり、また北区社会福祉協議会、あるいはあんしんセンターさん、あるいは民生委員さん、あるいは町会さんで、それぞれの地域で取り決めなり、あるいはいろんな事例をちょっと検討していただいて、ご議論いただくということが大事なんじゃないかなと思います。

それでは、ちょうど、ちょっとそろそろいいお時間になりましたので、最後、じゃあ副会長、お願いいたします。

【副会長】

本日は、各分野の代表の方、お集まりいただきまして、貴重なご意見ありがとうございました。地域の課題、また地域資源の把握につきましては、やっぱり各分野、連携して取り組んでいかなければなかなか難しいのかなと考えてございます。今後、課題の解決に向けまして、各分野からのご意見、また知恵を生かして、新たなサポート、サービスにして地域づくりに生かしていければというふうに考えてございます。本当にありがとうございました。

【会長】

はい。ありがとうございました。ちょっと最後、前後いたしますが、事務局のほうから今年度のスケジュールとか、ほか補足事項ありましたら、お願いしたいと思います。

【高齢福祉課長】

はい。すみません。活発なご意見ありがとうございました。今年度は、今回、第1回でございますが、年度末に第2回開催予定でございます。その間、また活発に活動して

いき、皆様のご協力も得ながら進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。